

Gプロジェクト2017

Be the light ～みんなでひとつ～

佐々木 亘, 森永 初代, 濱崎 千鶴, 中村 民恵, 末永 勝征

G Project 2017

- Be the light: All for one -

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

Gプロジェクトとは、学芸、情報、キルト、モード、フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し、グループでの活動をとおして個性の伸長をはかると同時に、プロデュース力、グループ力、コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマを「Be the light～みんなでひとつ～」に決め、制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。さらに、錦江町との連携事業“地域貢献プロデュース”も5年目となった。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出・販売を行ったかを、学生たちのレポートを中心に報告する。

Key Words: [問題解決能力] [協働] [大学祭] [地域連携] [学士力]

(Received September 25, 2018)

序

Gプロジェクトとは、「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは、個々の学生がグループ活動でのコミュニケーションをつうじて、集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指している。そして、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた六つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることが大きな目標である。2017年度は、学士課程教育の構築などの中央教育審議会答申を受け、教育課程の体系化や単位制度の実質化、教育方法の改善など学士力への取り組みを継続している。教員間でも互いの専門分野を活かしながら、教育の情報化にむけてICTを活用した教育の実践へ準備を開始した。

今回は、学生一人ひとりが「Be the light ～みんなでひとつ～」という想いを共有し、各自

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと結びつけた。まず、発表部門を「輝きのプレゼント」というテーマで3部構成にし、学芸プロデュースは、第1部を小学生の自分が高校生の自分を励ましに夢に現れるという動く絵本で表現。情報プロデュースは、「笑顔を届ける」というテーマのもとに、第2部を、プレゼントを箱に詰めて届けるという演出で飾った。モードプロデュースは、「星に願いを～想いを込めて～」というテーマのもとに、一人ひとりがそれぞれのシーンで星にどのような願いや想いを込めているかを表現して、第3部を個性的に演出した。

次に、キルトプロデュースは、共同制作で「Be the light～みんなでひとつ～」を効果的に表現し、また現代ビジネスコース全員分のシュシュを作成した。そして、フードプロデュースは、食品販売部門としてアップルパイとクッキーの制作と販売を行うと同時に、Gカフェで新商品を考案するなど、1・2年生が一致団結して、大学祭における憩いの空間作りに取り組んだ。さらに、5年目をむかえる地域貢献プロデュースは、錦江町の方々とは協力し純心水田プロジェクトでのお米を使ったコラボスイーツの商品開発や、テレビCM撮影など、精力的に活動した。

Gプロジェクトは、2016年度にすべてのプロデュースでシラバスの到達目標を統一し、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）に沿った指標としたが、アセスメント・ポリシーの観点から幾つかの問題点が見えてきた。今後、これらを分析しながら、専門教育の総合的な見直しを進め、それぞれの到達目標や評価基準を見直していくことを検討している。

本報告は、2017年度に行われた「Gプロジェクト」の内容に関する情報発信を目的としている。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告をPDCAサイクルの一つとして、さらなる発展を模索していく。

I. 情報プロデュース

前期は、例年どおり、一人もしくはグループで課題に取り組んだ。昨年同様に前期単位認定試験期間中に活動報告会を計画したが、事前にはリハーサルなどを行う余裕がなく、本番をむかえていた。前期の三つの到達目標に関する振り返りでは、「全体の目標を理解していなかった」、「目標を意識した計画を立てることができなかった」と、後期に向けた改善点が多く、夏休み中の軌道修正が求められる結果となった。自分のペースで行動してしまい、周りを見て行動できていないなど、集団で活動することに対する意識に欠けていたようである。前期の活動をとおして、相手のことを考えて行動することや時間を意識して行動することの大切さを学んだ。

夏休みから大学祭終了までは非常に忙しく、卒業論文に取り掛かる時期が遅れてしまった。しかし、中間報告会を1月に行い、後期単位認定試験期間中に、A3用紙1枚に卒業論文の概要をまとめ、ポスター発表を行うことができた。

後期の到達目標に関する振り返りでは、「計画を立ててもそのとおりに進められなかった」と反省する一方で、「それぞれが異なる役割を果たし、成長することができたと感じる」と、前期に比べ良い方向に進んだことがうかがえる。後期の活動をとおして、「作品を完成させる時に、自分ひとりではなく友人の意見を取り入れることが大切だと思った」、「最初は全部一人でやろうとしていたが、徐々に友人に頼れるようになった」、「問題が起きた時に、どこが悪くて

今の状態になっているかを冷静かつ論理的に考える力がついた」,「自分の思いを一人で抱え込むだけでは何も変わらないが,周りに伝えることで良い方向へと変わっていくのが実感できた」というように,一人ひとりの学生に学びの成果が認められた。2017年度の大学祭に向けての詳細な取り組みは,チーフである中山莉緒の報告を参照されたい。(森永初代)

情報プロデュースでは,ICTを日常生活の中で活用できるように,WindowsやMacのソフトウェアを利用しながら活動してきた。前期は,学内行事の撮影,名刺やUSBメモリの名前シール,新聞,学校周辺地図等の作成を行った。後期は,大学祭で上映する映像の制作やNHK鹿児島放送局が企画しアイデアが採用された「学生が作る西郷どんPR動画」(以下,西郷どんPR動画)の制作に取り組んだ。前期中は,12名のメンバーの役割分担がうまく機能せず,パソコンソフトの使用方法などの情報共有が徹底できなかった。しかし,後期には,前期中に学んだ知識や技術を活かし,12名全員で一丸となって取り組むことができた。プロデュース内の絆も深まると同時に,今までにない貴重な体験をすることができた。

大学祭では,例年どおり,現代ビジネスコース「発表部門」の映像を制作した。2017年度は,大学祭の名称が「純大祭」から「純短祭」に変わり,先輩方が築き上げてきた伝統のバトンを受け取るとともに,「Be the light ~みんなでひとつ~」というコーステーマのもと,さまざまな個性を持つ私たちが助け合い,支えあい,一つの目標に向かって進む姿を表現できるような映像を目指した。

映像のコンセプトを「笑顔を届ける」とし,お世話になった先輩方をはじめとする先生方,後輩,両親,地域の方々に感謝の気持ちを添えて笑顔でプレゼントを渡す光景を表現するために,プレゼント箱(図1)を用意した。映像を見た方が笑顔になり,私たちの「笑顔」と結ばれていく。そういう想いを込めた。



図1 プレゼント箱

4月から,現代ビジネスコース発表部門の担当である学芸・モード・情報の各プロデュースの,チーフ・サブチーフの6名が,授業のない時間や昼食時間に週1回,ミーティングを行った。その中で,各プロデュースの進捗状況などを報告し,作品の構成を固めた。三つのプロデュースで統一感のある作品を作れるように話し合ったが,コーステーマにとられすぎて自分たちの作りたい作品が何かを見失っていた時期があった。次年度以降は,コーステーマを決める前に,発表部門である程度の構成を練ることを勧めたい。

撮影と編集は,夏季休業期間から始めた。リハーサルをきちんと行っていなかったため,撮影では出演者にコンセプトを上手く伝えることができずに,撮影時間が長引いてしまうことや,服装や背景の統一をしていなかったため,再撮影することも多かった。また,編集者とのコンセプトの共有が十分でなく,さらにiMovieでの編集作業に活用できる素材が少なかったため,編集が滞ることもあった。編集作業が終了してもその後のファイルへの書き出しがスムーズにできずに大講義室でのリハーサルの時間に間に合わなかったり,きちんと保存が出来ていなかったりと二度手間になってしまうことも多かった。このことから,計画を綿密に立てて行動

すること、時間を見て余裕ある行動をとることが大切であると学んだ。

10月に入ると、発表部門合同でのリハーサルが大講義室で始まった。夏季休業期間中にパソコンの接続の仕方やプロジェクターの使い方、マイクの準備の仕方などについて、情報プロデュース内での共通理解が足りなかった。そのため、リハーサルが始まる前に焦ってしまい、他のプロデュースの人たちに迷惑をかけてしまった。次年度以降は、夏季休業中にメンバー全員で使い方をしっかり理解しておくべきである。

西郷どんPR動画は、今年度初めて取り組んだイベントである。事務局の先生が、NHK鹿児島放送局の「西郷どん」PR動画募集のチラシを森永先生に勧めてくださったのがきっかけとなった。夏季休暇の最終日にメンバー全員で考え、全部で21作品を応募した。そのうちの1作品が選ばれ、撮影から編集までをNHK鹿児島放送局の方々と一緒にいった。

照明や集音マイクなど普段使わない撮影機材を、NHK鹿児島放送局の方々に一から丁寧に教えていただき、撮影を行った(図2)。撮影をするには、出演してくれるキャスト、小道具制作、天候の状況が深く関わっていることを改めて感じた。照明器具をうまく利用することで、日が暮れてから撮影した廊下や階段のシーンが朝のように明るいシーンとなっている。



図2 使い方を学ぶ様子

編集は、情報プロデュースから4名がNHK鹿児島放送局へ行き、編集室で行った。大学祭で編集したソフトウェアとは違い、新たな編集方法や表現方法を学ぶことができた。完成したPR動画は、2017年12月3日(日)から鹿児島県内限定で総合テレビやEテレで放送された。情報プロデュース全員が企画、撮影、編集が好きであることを再確認するとともに、私たちにとってかけがえのない貴重な経験となった。

大学祭に向けての取り組み、その他の行事やイベントへの参加をとおして、一つのプロジェクトを成功させることの大変さと作り上げた時の大きな達成感、皆で取り組むことの大切さを学ぶことができた。今年度は、大人数のため意見がなかなかまとまらず、映像の構成を決めるのに時間をかけすぎてしまった。特に、活動開始当初は映像を制作するまでの期間が短いことに実感が湧かず、メンバー全員の意識が低かった。学生会役員、純短祭実行委員、クラス委員など他の役割を担っている人も多かったため、時間を調整することが難しかったが、常に相手のことを考えて行動することで、チームワークを高めることができた。無事に舞台発表を終えることができた達成感は一生涯忘れないだろう。分からないこと、新しいことに挑戦することの楽しさを感じながら取り組むことができたのは、先生方や先輩、友人、後輩が周りで支えてくれたからである。その環境に感謝し、どんなことにでも挑戦する気持ちを忘れずに行動するよう心掛けたい。(中山莉緒)

Ⅱ. 学芸プロデュース

学芸プロデュースでは、共同研究として、大学祭での発表を目指し、「動く絵本」作りに取り組んだ。2017年度の人数は、わずか2名。これまで経験したことがない小人数のため、完成できるかどうかとても不安視していた。

そのため、全体的に急ぐように指導した。当初、教師と学生が入れ替わるという内容でシナリオを作成した。しかし、大ヒットした邦画との類似を指摘され、変更せざるをえなかった。そこで、大学受験をめざす女子高校生が自分の良いところを探せずに苦労しているところに、小学生の自分が助けに来るという内容に急いでシナリオを書き換えた。ところが、リハーサルの段階で「絵が怖い」という指摘が複数上がったため、ここで再度書き換えを余儀なくされた。

この段階で大学祭まで一ヶ月ほどこ余裕がなかった。いったいどうなることか心配したが、絵を単純な線での構成に変えることでどうにか間に合うことができ、大学祭二日目の2017年10月29日(日)に、発表部門の第1部を、無事飾ることができた。二人の連携プレイは見事であった。

大学祭終了後は、引き継ぎノートの作成と卒論に集中したが、なかなかペースが上がらないまま、卒業を迎えることになってしまった。やはり人数が少ないと競い合うという要素が乏しくなる。大学祭が終わりではないということを、今後徹底していきたい。ともあれ、「動く絵本」がそれなりのメッセージ豊かな作品に仕上がったことを大きな成果としたい。(佐々木亘)

学芸プロデュースでは、共同研究として大学祭での発表を目指し、「動く絵本」の作成に取り組んだ。2017年度のコーステーマは「Be the light～みんなでひとつ～」、そして、発表部門としてのテーマが「プレゼント」、その中でも学芸プロデュースのテーマは「エールを届ける」である。そのため、「人が輝くためには他者の助けが必要である」という点を大きく取り上げて制作を進めた。

発表部門全体で統一感を持たせるために「プレゼント」というテーマを掲げたが、その内容は、学芸プロデュースからは「エール」、情報プロデュースからは「笑顔」、モードプロデュースからは「想い」をお客様へ「プレゼント」というもの。しかし、それぞれのプロデュースが自分たちのテーマに沿いすぎて当初の目的であった統一感があまり感じられなくなってしまうという問題も発生した。

この問題は、それぞれ舞台のつなぎを工夫することで解決を試みた。学芸プロデュースから情報プロデュースへは笑顔の画像を使うことで自然につなげることに成功した(図3)。

今年度の作品は、脚本、作画ともに何度も書き直しをする事態に陥った。当初考えていた脚本は、現代ビジネスコースが設立10年目ということもあり、鹿児島純心女子短期大学の先生と学生が星の妖精によって入れ替わってしまう、という物語であった。しかし、テーマとの関連性を考慮し、何度も書き改めた結果、自信のない高校生の主人公が小学生の頃の自分と会話をする中で、自分を見つめなおす物語となった。

また、当初は図4のような絵柄で描いていたが、残り期間の都合により作画を絵本のようなふんわりとしたタッチに変更した(図5)。そうすることで、線を減らし1枚にかかる時間を短縮することに成功した。手抜きという印象を与えてしまうかと憂慮したが、意外にも周囲の反



図3 笑顔の主人公



図4 当初の絵柄

応は良いものだった。前期の初めの時期に、絵はそこまで凝る必要はないのではないか、という助言もあり、気兼ねなく実行に移すことができた。そして、手を抜いていると感じさせない工夫として、動きを増やすことを意識して制作に取り組んだ。

会話でのやり取りが多い脚本であったため、表情の種類を増やしたり、違う角度からの絵を増やしたりと、動画が単調にならないよう努めた。先輩方や先生方からも助言をいただき、改善をすることで、見る人を飽きさせないような映像にすることができたのではないかと思う。また、時間の流れを表現するために、図6のような画像を間に入れた。

2017年度学芸プロデュースを選択したのは2名であったため、作業をそれぞれ、脚本と音、作画と動画編集というふうに分担して制作に取り組んだ。さらに、末永先生の提案により、「サポート隊」というものが結成されたのが今年度の特徴だといえるだろう。絵が上手な1年生の情報があったが、それぞれの時間の都合などもあり、1年生にお手伝いは頼まないことにした。そこで、キルト、情報、モードからそれぞれ2人ずつ、学芸のサポートに回っていただいた。特に声のキャストは、出演者4人中2人はサポート隊に担当してもらった。母と小学生という難しい役ながらも、こちらからの要望にも応えていただき、とても良いものできたと思う。

「動く絵本」の制作を行ううえで、多くのことを学ぶことができた。特に、相手に伝えることの難しさを強く感じた。同じものを見ても、全員が同じ感想を抱くわけではなく、それぞれの受け取り方がある。見る側に共通の印象を与えるためにはどうすればいいのか、という点に気を使った。また、たった二人なのだから、分かり合えるだろうという思い込みから、情報共有が十分ではなかったという点が反省点として挙げられる。

さらに、作業分担を徹底したことから、自分の仕事はわかっても、相手の動きが読めないという、予期せぬ事態に陥った。効率よく作業を進めるための行動が、かえって無駄な時間を生んでしまう結果となってしまったわけである。大学祭での舞台発表を見に来てくださる方々、共に制作をする相手、どちらもしっかりと向き合うことで、より良い作品作りにつながり、人間的にも成長することができるのではないかと考える。支えてくださった多くの方々へ感謝の気持ちを伝えたい。(日高みずき)



図5 絵本のようなタッチ



図6 時間の流れを表現



図7 小学生の頃の主人公

Ⅲ. モードプロデュース

2017年度のモードプロデュースはいつもより選択者が多く、16名の個性あふれるメンバー

が、それぞれに制作する作品でコーステーマにもとづいた発表部門のテーマを表現していくことになった。秋廣萌の報告にもあるようにコーステーマは「Be the light ～みんなでひとつ～」、発表部門全体は「輝きのプレゼント」、そして、モードプロデュースでは「星に願いを～想いを込めて～」。晴れた夜空に輝く小さな星たち。一つひとつは小さいけれど、一生懸命に輝き、いつでも誰かの光になりたい。小さい輝きでも仲間が集まれば天の川となるように、みんながひとつになった時大きな力を発揮することができる。

このコーステーマをモード選択者はもちろんGコース全体が理解し、活動しなければならないが、テーマを周知するまでに時間を必要とした。この点が今回のGプロジェクトにおける活動の特徴でもあると考える。学生達はPDCAサイクルを前提にGプロジェクトの活動を開始する。計画を立て、それをもとに全員で実行した結果を評価し、その活動を振り返って反省、そして改善に取りくまなければならないが、PDCAサイクルを実践することは容易ではなかった。

報告・連絡・相談・確認の徹底と小グループに分けてのミーティングの必要性を先輩達から引き継いでいたにもかかわらず、小グループでのミーティングを行うことが、前年同様難しかったようである。小グループで話し合うことができたら、テーマの理解度を高めることができたのではないかと報告している。

前期の到達目標を振り返ると全体の目標を正しく理解し、課題を解決する中で次に活かしていかなければならないが、前期はそれぞれのドレスを制作することに一生懸命で、Gプロジェクトのテーマを理解するまでには至っていなかった。後期の授業が始まり、舞台構成についてアイデアを出し合う中で、集団での活動に対する自分の役割を少しずつ意識するようになっていった。

集団の人数が増えたことで、メンバー間の意思疎通を図るためにかなりの時間を要し、問題も多く発生した。しかし、その問題の解決策を探り考えることで、学生たちは自分のチカラを知り、乗り越えるために知恵を出しあい、考えることで思考力を高め、判断する能力を養うことができたのではないかと考える。(中村民恵)

「Be the light ～みんなでひとつ～」というコーステーマが決定し、発表部門で「輝きのプレゼント」を表現しようと決めた。そして、モードプロデュースでは「星に願いを～想いを込めて～」というテーマをもとに、それぞれのシーンで星にどのような願いや想いを込めて演出するのかを考えた。また、約半年間かけて制作したオリジナルドレスを九つのシーンに分けて構成することを基本とした。現代ビジネスコース10周年という



図8 星に願いを

こと、これまでの先輩方が築いてくれた伝統を大切にしながら、様々な困難から助けてくださった先輩方への感謝の気持ちも表現していった。そして、私達から後輩達へ想いのバトンを渡し、これからの未来にも伝統をしっかりと引き継ぎたいという想いも含め、最高のステージを創り上げた。

今年度は、メンバーが16名といつもよりも多かったため、舞台構成に苦戦した。これまでの大裁女物単衣長着（浴衣）からの始まりを、舞台冒頭をドレスから始めることによってイメー

ジを変えようと試みた。それぞれの想いをわかりやすく伝えるため、スクリーンに筆で書いたメッセージを映した。

シーン1 星に願いを (ショッキングピンク, 図8)

星が輝く夜空になるよう背景を工夫し、PCで作成した天の川をイメージした映像を投影した。「皆様の想いや願いが星に届きますように…」と祈る。空に指を指すと流れ星が流れる演出にした。

シーン2 大裁女物単衣長着

シーン1と同じ曲を使用することで、洋から和の流れを自然と変化するように表現した。「織姫と彦星が出会えますように…」という想いが込められている。

シーン3 喜び (黄色・白, 図9)

七夕の夜「織姫と彦星」が出会えた、喜びを表現している。曲調を明るくすることで、喜びの声が届くように演出した。アップテンポな歩き方で、嬉しさが伝わるようにした。

シーン4 友情 (水色とピンク・サーモンピンク, 図10)

友情の大切さを表現、「一人では生きていけない」、「友から支えられ、支えながら生きている」ことを演出した。手を取り合うことで、支え合うことを表し、レースの手袋を付ける事で、エレガントな雰囲気を出した。

シーン5 大人らしさ (紺・黒赤, 図11)

お互いがぶつかりそうで、ぶつからない友情関係を演出。細かな表情の変化やポーズにこだわった。

シーン6 個性 (赤・ワインレッド, 図12)

彩度、デザインの違いにより、それぞれの個性を赤色で演出した。シルエットを強調した表現にこだわる。

シーン7 譲れないもの (黒・エメラルドグリーン, 図13)

ブラックホールをイメージした演出に挑戦。「様々な想いを巻き込んでいき、新しくする」という想いが込められている。恨み、睨み、怒り、全てのものを巻き込む様子を表現した。バックスクリーンにブラックホールの渦を投影することで、観客がイメージできるように試みた。

シーン8 想いやる心 (ラベンダー・薄ピンク, 図14)

お互いを想いやる心とお互いを必要としている心を演出。使用した曲名「あなたが側にいて」という想いを伝えた。二人が見つめ合うシーンがみどころである。

シーン9 希望 (サーモンピンク・水色・グレー, 図15)

最後は3人のコンビネーションで未来への希望を演出。「皆様に幸せが訪れますように…」と筆で書き、バックスクリーンに投影、想い



図9 喜び



図10 友情



図11 大人らしさ



図12 個性



図13 譲れないもの



図14 想いやる心

の強さを表現した。お互いに「いらっしゃいませ」「ようこそ」という想いを笑顔の中に込めた。使用した曲名「時は永遠に」から、皆様の幸せを願いながら演出した。

今回は九つのシーンに分け、舞台を創り上げた。現代ビジネスコース10周年という節目から、エンディングにもこだわった。昨年同様、観客のみなさまにも自分たちの演出が、自然と伝わるように邦楽を用いた。使用した曲はナオト・インティライミの「今のキミを忘れない」で、「次の季節が来たから ここで離れ離れだね ずっと一緒にいたいけれど それぞれの夢（みち）を歩む」、「でも少しくらい覚えていてほしい 一緒に過ごした時間（とき）を 何年経っても色褪せない思い出を ありがとう ありがとう 今なら素直に言えるよ」（アルバム：『今のキミを忘れない』、曲：「今のキミを忘れない」、アーティスト：Naoto Intiraymi）の歌詞に注目してほしい。10年経った今でも、先輩方はかけがえのない仲間に出会えたことで、一生の宝物を手に入れている。これは現代ビジネスコースで築き上げた「強い絆」である。

今回、発表部門のプロデューサーとして活動する中で、たくさんの方に支えていただいた。私達のことを「大丈夫かな」と心配し、かけつけてくださった先輩方、舞台指導をしてくださった先輩方、数多くの先輩方の力添えが大きなエネルギーとなった。ぶつかりながらも助けあった仲間がいたからこそ、いくつもの困難を乗り越えることができた（図16）。

そして、どんな時も一番身近で支えてくれた家族の存在は大きい。支えてくださったすべてのの方々に感謝の気持ちを伝えたい。私達はこれから卒業し、別々の道を歩むことになる。この2年間で学んだことを心の糧として、謙虚な姿勢と感謝の心で歩いていきたい。次の世代にバトンを繋ぎ、「自分たちらしい」舞台を創ってくれることに期待し、応援したい。（秋廣萌）

IV. キルトプロデュース

キルトプロデュースは、作品制作をとおして、計画性および実行力・表現力を身につけることができる。しかし、いずれにしても本人次第である。つまり技術をしっかりと身につけ活かすことができる一方、手を抜くことも可能である。作品制作は、基本手縫いで行う。これは、私自身の見方であるが、ミシンを使用するよりも手の方が温かみと優しさ、柔らかさを感じるからである。と同時に自分の手を使って一針一針縫うことで、制作過程が理解でき、作品に込める想いも一層深くなると考える。

また、他の人の作品を鑑賞することとおして、多くの発見もある。今年度は、幸いにも長島美術館で「花のキルト展－蜷川宏子のカラフルキルトを中心に－」が開催された。夏休み期間であったため、学生たちには時間を見つけて行き、レポートを提出するよう促した。学生たちは、同じ「花」でも表現方法や配色、キルティングの仕方によって、受ける印象が違うこと



図15 希望



図16 2017年度メンバー

を感じ、勉強になったようである。作品の中にヨーヨーキルトで表現したものがあつたが、これに感銘を受け、さっそく後期の作品に取り入れた学生もいた。

さらに、キルトプロデュースの活動の1つである共同制作をとおして、相手の意見を聞くこと、自分の意見を述べること、協力することの大切さも学んでほしい。一人ひとりの感性は違うため、メンバーが集まると多くのアイデアが出てくる。今回は、全員が協力し、それぞれのアイデアを活かすことができたのではないかと思う。図案や配色、表現方法はどちらかというサンプルだったが、その中に自分たちの想いはしっかり入っていたようだ。1年間の活動をとおして、少なからず力をついたのではないか。これから社会に出ていく学生一人ひとりが、さらに成長していくことを願う。(濱崎千鶴)

2017年度は、7名での活動となった。それぞれ個性があり、和気あいあいとした雰囲気の中で作品を仕上げた。初めは、このメンバーで上手くまとまるか不安だったが、完成に向けて全員で協力することができた。

個人制作では、ポーチや壁掛け、筆箱、クッションカバーなど日常生活で使えるものや生活の中で癒しを与えるものを、想いを込めて制作した。それぞれがデザインを練る段階から、自らが思い描くような作品になるよう布の配色・配置を考え作品制作に取り組んだ。

2017年度の現代ビジネスコースのテーマは、「Be the light ～みんなでひとつ～」であった。共同制作では、このテーマをもとにして、キルトプロデュース選択者全員でデザイン案を持ち寄り、話し合いの中で1つのデザインにまとめていった。デザインのポイントは、モチーフである星を取り入れ、縁を紺色にすることで、夜空に輝く星を表したことである。また、中心の大きな星で支えてくださった先生方や先輩方への感謝の気持ちを表し、星のかけら(ダイヤ)に、5つのプロデュースが繋がり、成長していくという想いを込めた(図17)。

6月10日に濱崎先生とキルトプロデュース選択者7名で布を購入しに行った。共同作品では、黄色を基調としたものが多かったため、配色に悩むこととなったが、黄色の色を違う柄、似たような色でカバーすることで、最終的に表現したかったイメージどおりに出来上がったと感じる。

制作は8月8日から開始し、完成は10月13日であった。共同制作を行うにあたり、現代ビジネスコース全員がこの作品を見て心をひとつに団結しようと意気込めたら良いと考えた。そこで、大学祭実行委員のメンバーのイメージと合うように、相談をしながら作成した(図18、図19)。

四つの角には皆が個性を生かし、それぞれの舞台で輝くという想いを込めて、カラフルな星をパッチワークで作り、アップリケした。この星のパーツの布には、個人制作で使用した想

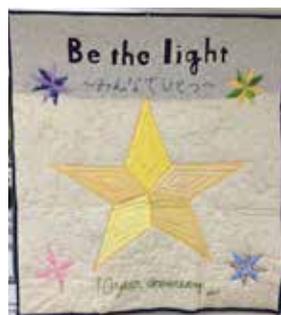


図17 共同制作作品



図18 共同作品制作途中



図19 共同作品制作途中

入れのある布を用いることで、新たな息吹を吹き込むことができた。すべてのパーツをアップリケした後、現代ビジネスコースのテーマにはリバースアップリケとアウトライン・ステッチを用いた。また、今年度が現代ビジネスコース10周年ということで「10 year anniversary」の文字をアウトライン・ステッチで刺繍した。

トップの制作が終わるとトップ・キルト芯・裏布を重ね、各パーツに落としキルトを施した。また、空いているスペースに星の形でキルティングを行い、モチーフである星を強調した。キルティングが多く、1つの作業に時間がかかることもあったが、プロデュースの時間や空き時間を活用しながら全員で協力して制作することができた。

先輩方が受け継いでくださった髪飾り制作に関しては、普段からみんなに喜んで着けてもらいたいという思いから、「シュシュ」という案がでた。この案をもとに、昨年と同様に現代ビジネスコースの1・2年生が一致団結して大学祭を盛り上げていけるようにとの願いを込めて制作した。今回は、1年生が水色、2年生が白、先生方が紺色の色で作った。大学祭前からも日常生活においても使用してもらうため、5月からキルトプロデュースのメンバーで話し合いを行い、現代ビジネスコースの2年生67名に2年生用のシュシュの色のアンケートを取ったところ、白色に決定した。

シュシュの布、ゴムひもは、6月10日に購入した。作業工程としては、布の裁断をした後、ミシンで筒状に縫い、ゴムひもを入れて縫うという単純なものであった。しかし、華やかで輝いて見えるように作りたいとサテン生地を用いたため、うまく縫うことができず大変であった(図20)。



図20 シュシュ

個人制作においては、個人が計画性を持って予定どおり進められるように努力するべきであった。結果として、提出期限間際に完成となった学生もおり、メンバー内でお互いの進捗状況について声を掛け合うなど、相手を思いやる姿勢がもう少し必要だったのではないかと感じる。

共同制作においても、細かく目標を決め、一人ひとりが意識を高く持ち制作を進めるべきであった。しかし、それにメンバー全員が気づき気持ちや行動を改め、積極的に共同作品に取り組んだため無事に完成させることができた。この経験は、それぞれにとって貴重なものとなっていく。

作品を制作する中で、丁寧な作業を心がけ、確認をすることの大切さを学んだ。メンバー間でも制作が進んでいくにつれてお互い会話をして絆を深めていくことができたと思う。制作方法を学んだだけでなく、それぞれが自分に足りないところや時間の使い方など日常生活において大切なことを学ぶことができた。(西園友理)

V. フードプロデュース

フードプロデュースでは、郷土料理や郷土菓子を作り、また鹿児島島の食材を用いて自分たちで献立を立て実習することで、鹿児島島の食について学ぶことができる。また、調理実習や大学祭の準備、販売品の制作をとおして、グループ活動における基本的なことを身につけ、行動力

や気づく力に磨きをかけることができる。

今年度の学生には、グループ力が少し足りない気がするとの助言を受け、グループ編成を多少変えてみることにした。これまでは、前期、後期に最初の段階でのみグループ編成を行っていた。つまり、同じメンバーで活動していた。しかし、今年度は同じグループで3回活動した後、グループの編成をし直し、新しいメンバーで実習することを試みた。慣れたと思えば交代するというのを何度か繰り返すことで、次第に自分のすべきことや、相手のことを考えて次の行動をとることができるようになったのではないかと。

このことが、大学祭の活動にもよい影響を与えたのではないかとと思う。準備、制作で大変な中であっても、チーフ・サブチーフはどのような指示を出せばメンバーが動きやすいかを考え、メンバーたちはチーフたちの想いを受け止め自分から動くようになったようである。つまり、お互いの考えを伝えることができるようになり、情報共有することで意思疎通ができ、動きがよくなった。大学祭の活動内容は、学生の報告を参考にしていきたい。

調理実習や学外研修、研究発表をとおして得た、「鹿児島の食」の良さを次の世代に繋げてもらいたい。社会に出ると、新しい出会いがあり、その中でメンバーの一員として動くことになる。その際、これまでの活動を十分に活かしてくれることを期待する。(濱崎千鶴)

フードプロデュースは、実習をとおして鹿児島の郷土料理を学び、また、大学祭に向けてアップルパイ・Gカフェ・クッキーの三部門に分かれ、商品を制作し販売する。今年度は、30名で活動した。アップルパイは、伝統の味を引き継ぎ、フードプロデュース全員で制作する。一つひとつの工程は手作業なため、見た目にこだわり、半年間かけて練習に取り組んだ。また、今年のパッケージは、純心と10周年である現代ビジネスコースをイメージして制作されたものである(図21)。

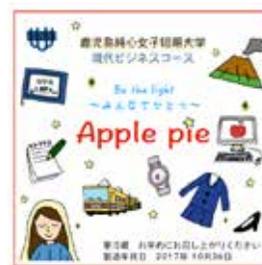


図21 パッケージ

Gカフェは1・2年生で活動し、当日、実際にその場で作り、販売する。事前に行った実践練習の際に、全員が流れを理解することで、手早い連携に力を入れた。Gカフェのラベルは、コーステーマの「Be the light ~みんなでひとつ~」より、星をモチーフにデザインされた(図22)。



図22 Gカフェラベル

クッキーでは、前期中は、試作に取り組み、当日販売するクッキーは1年生が制作するため、そのサポートをした。試作を重ねた結果、2パックのクッキーを販売することになった。一つ目は、地域貢献の際にお世話になっている大隅半島の塩と煎茶を使用した大隅半島海と大地の恵みパック、二つ目は、現代ビジネスコース10周年を記念し、10年間愛されてきたクッキーを詰めた現ビ10周年記念パックと決定した。



図23 新しいオーブン

今年度から、1号館校舎が新築され、使用する調理室・加工室が新しくなった。そのため、施設や器具の使い方にも変更があった。

アップルパイ・クッキーは新しいオーブン（図23）を使用するため、伝統の味や美味しさを保てるよう調整が行われ試作を重ねた結果、アップルパイは加工室、クッキーは調理室と給食室のオーブンで焼くことになった。また、大学祭関係の道具は、新1号館の1階倉庫へと移動し、当日のGカフェの販売場所は、材料を新1号館の調理室から運ぶことを考慮し、出入りのしやすい学生ホールの入口側に変更した。

大学祭当日は、台風の影響により、あいにくの天候であった。そのため、当日アップルパイ・クッキーの販売場所が、事務局前から27号館7階体育館に変更された。実際に販売すると、アップルパイやクッキーを購入されたお客様がバザールの商品も購入してくださり、良い結果となった。次年度からも体育館での販売を希望する。Gカフェは、制作場所の学生ホールを掃除して、材料運びや道具の用意をした。全員で手分けし、時間に余裕を持って準備を行った。

販売数と販売金額に関しては、アップルパイ1箱1200円で、シナモン有と無しの2種類合わせて100箱であった。Gカフェは、新メニューのピーチソーダを含め10種類の商品を販売した。クッキーは1袋100円で、2日間で「大隅半島大地と海のみぐみパック」359袋、「現ビ10周年記念パック」412袋販売した。また前年同様、余ったクッキーや形が崩れてしまったお客様に販売できないクッキーは、学生販売用として袋詰めした。40袋完成し、1袋50円で、全て販売できた。

表1 大学祭総売上（単位：円）

部門	売上	経費	純利益
クッキー	79,001	31,295	47,706
アップルパイ	120,000	73,539	46,461
Gカフェ	191,350	106,035	85,315
合計	390,351	210,869	179,482

フードプロデュースでの活動をとおり、全員が集団の中で自分の役割を見つけ、活動できたのではないかと感じる。初めは、人数が多いこともあり、自から進んで行動する姿勢に欠けていた。そのため、上手く連携がとれず、活動に時間が掛かり、効率の悪さが目立った。このままでは当日の販売制作に影響が出ると考え、一人ひとりが活動の際に、どうあるべきかを共有した。すると、一人ひとり気づいていることは多いが、行動に移せていないことが原因にあると分かった。

その後は、一人ひとりが自分の役割を見つけ行動することを意識して活動した。その結果、販売用制作では、時間内により良い商品を制作できた。この経験を踏まえ、フードプロデュース全員がチームで活動することの達成感や喜びを感じたと思う。多くの活動において、準備や共通理解の不足から、トラブルが起きた。何事も先を想定し、準備を怠らず備えること、そして、何度も情報や考えを共有し、全員で協力することが大切だと学ぶことができた。（福那瑠美）

VI. 地域貢献プロデュース

5年目の地域貢献プロデュースの選択者は13名で、さらに活動の幅が広がった1年であった。

1年間の活動は、昨年に引き続き学生一人ひとりがA3用紙のポスター形式で報告している。錦江町の「やまんなか音楽会」は、学生たちが毎年、灯籠作りに協力していたが、台風や日程の問題で参加できずにいた。このイベントに合わせて行われた今年度の稲刈りは、例年に比べ1週間ほど遅く、20アールのうち半分は既に収穫されていた。収穫時期が遅れると「胴割れ」の心配があるとの説明に、これまで稲穂の状態と天気を確認して直前まで日程調整を行っていた理由がようやく理解できた。

昼食後、でんしろ館の調理室で夕食のカレーを食事係の学生たちが準備し、音楽会に参加する学生は錦江町に残った。2年生9名と1年生3名に英語科2年生2名を含めた14名の学生たちは、地域おこし隊となった卒業生といっしょにバンガローに宿泊した。英語科の学生は、「携帯の接続や交通の不便さはあるけれど、夕焼けが美しく、星が綺麗で、何かに追われて生活している日頃の焦りや疲れから解放され、自然の恵みに癒されました」、「鹿児島にはこのように素晴らしい所が数多くあることに気づいたので、もっと興味を持ち、足を運んでみたいと思います」と報告してくれた。また、地域貢献の学生からは、「地域の方々の協力を惜しまない姿を見て、地域の方々の温かさを感じることができました」、「お客様目線で企画・運営することが大切で、何事にも十分な準備、確認、相手を想う気持ちを忘れずに、これからの活動も皆で協力して取り組みたいと思います」と報告があった。

初めての参加で準備不足の面もあったが、次年度への反省として引き継ぎたい。今年度は、他に観光PRCM制作への協力も行なったが、その活動の詳細は、チーフである淵脇こころの報告を参照されたい。(森永初代)

2017年度は、地域貢献プロデュースが5周年を迎えた。例年どおりの活動として、錦江町で田植えから稲刈りまでを行う「純心水田プロジェクト」、そのお米を使ったコラボスイーツの商品開発、「半島隅くじら元気市」、「錦江町田舎市場」、「いきいき秋祭り」の特産物販売補助の他、おはら祭りでは「鹿児島純心女子短期大学地域貢献プロジェクト」踊り連への参加を行った。また、今年度は新たに「やまんなか音楽会」への参加、観光PRCMへの撮影協力も行った。

錦江町は、2017年度、町を世界へと発信するべく、観光PRCMの制作を手がけた。そして、私たちもこの活動に参加し、若者目線から錦江町の魅力を伝えるものを目指した。このCMを作るにあたり、ロックバンド「テスラは泣かない。」に特別に楽曲「町」を提供していただき、その音楽に合わせてCMの制作を進めることとなった。

このCMは、卒業して夢を追いかけて鹿児島を離れることを決断した人、環境が変わって友達や家族となかなか会えなくなってしまう人などへ、「錦江町はあなたをずっと応援している」、「もし帰ってきたくならいつでも遊びにおいで」という応援メッセージを発するものである。PR動画ではあるが、多くの人の心に刺さるものとなっている。

このCMがテレビ放映される時期は3月上旬とのことで、春の装いで撮影に参加した。しかし、撮影を行った12月17日は、最高気温7度の真冬、夕暮れの神川海岸や扇落としの滝、廃校となった旧神川中学校などを撮影地とし、一日にわたって撮影を行った(図24)。撮影当日は外にいることすら大変であったが、寒そうに見えない佇まいや表情ができたのは、錦江町の方々やこのCMの企画制作を担当された株式会社総広様のおかげである。撮影場所の近くでは温か

い飲み物を、昼食には地元で評判のお店のケータリングでカレーライスを提供してくださり、とても恵まれた環境の中で撮影に参加させていただいた。また、1月になってから、撮影に参加した学生を中心に歌の録音を行い、15秒と90秒のPR動画が完成した。現在、YouTubeの錦江町公式チャンネルで公開されている。



図24 扇落としの滝（撮影）

1年間をとおして錦江町の活性化に協力することで、自分の未熟な点に毎回気付くとともに、大きく成長できたと思う。もともと錦江町は親しみのある町ではあったが、この活動をする中で錦江町の魅力を肌で感じ、錦江町の方々から人とのつながりの大切さを学んだ。たとえ過疎化で人が減っていく現状があっても、自分の町に誇りを持ち、他の地域の人々に錦江町の良さを知ってもらうように必死で頑張っていらっしゃる錦江町の方々の姿は本当にかっこいい。恵まれた環境で活動できたことに感謝の意を忘れず、さらに大きく成長していきたい。（淵脇こころ）

結び

もともと、Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略—コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成—」という課題名で、2008年度から3年間、文部科学省の「私立大学等経常費補助金特別補助＜教育・学習方法等改善支援＞」における「学生の実体験を重視した教育研究」の一つとして採択及び交付を受けて、進められた。

2017年度のGプロジェクトのテーマは、大学祭全体のテーマである「てとて～Hand in Hand～」をもとに学生が考え、「Be the light～みんなでひとつ～」に決まった。現代ビジネスコースでは、個々の学生がグループ活動つまり協働の中でのコミュニケーションをつうじて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた6つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めるといった目的を掲げてから、10年も経過している。

毎回、“Gプロジェクト”をつうじて、学生が多くの困難に直面しながらも、自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな収穫である。友人や地域との協働で何かを成し遂げるためには、多くのことが要求される。すべての学生が「コミュニケーション」の難しさを知ると共に、「報告、連絡、相談」の大切さと「確認」の必要性を実感したはずである。

これから社会人として活躍する学生たちが、「社会に必要とされる人材」として活躍するようになることが、現代ビジネスコーススタッフ全員の願いである。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けていく。また、学士課程教育における学士力を意識し問題解決能力の育成など教育の質的向上に向けて成長させていかなければならない。そこに、我々の教育戦略が存在する。

